

39 日本の鍼灸を輸入した中国民国時代

鍼灸医学家

— 承淡安の業績について

宮川 隆 弘

中国民国時代、来日して日本の医書籍等を輸入して中国の書籍学に対して多大に貢献した楊守敬以外にも中国医学に日本の鍼灸を輸入し、中国鍼灸学の確立に貢献した承淡安がいる。これまでに彼についての報告はみられないが、今回、彼の業績について再検討したので報告する。中国人名辞典によれば、「承淡安（一八九九年～一九五七年）。現在の江蘇省江陰県花墅の人で代々業医であった。幼い頃から父に付いて医学を学び、内、外科各方面に通じ、特に鍼灸に長じていて患者から深く信頼を得ていた。一九三七年無錫に中国鍼灸学社を創設し、自ら社長となり、その社は『振興中華の絶学』を基本理念とした。一九三二年日本に渡って学を求め、東京鍼灸専門学校に

学んだ。翌年学び終わり帰国して中国で初めての中国鍼灸専科学校を創立した」とある。

彼の業績の中で大きな特徴として、「振興中華の絶学」が反映しその著作『中国鍼灸学』（一九三二年初版、一九三七年中国鍼灸学研究社増鉛印本）に示されている。その要点を以下に挙げる。

一、現代医学を踏まえて説明している

各孔穴の説明は、従来取穴法、刺鍼深度、灸壮数、主治などに言及されていたが、本書においては「解剖」「部位」「主治」「要旨」「手術」と分けて説明している。

「解剖」は西洋医学の解剖用語を用いて孔穴の皮下の筋肉、動・静脈、神経を説明している。「部位」は、現代用語を用いた取穴法。「主治」は歴代鍼灸書などからの引用で中国医学的病名を列挙している。「要旨」は、孔穴の作用。応用例など。「手術」は鍼の深度、置鍼する時間。灸の壮数など。

また、本書全体の随所に西洋医学の観点から見た鍼灸の効能を踏まえた説明がみられる。

二、治療方法は歴代の鍼灸書を踏まえて敢えて中国医

学的病名を用いている

病症名は中国医学を用いているが、「病因」「脈象」「治療」「助治」「予後」などで構成されている。現在の中医鍼灸書と同じ形式で著されている。本書における大きな特徴としては「治療」において取穴部位のみでなく、刺入深度及び手技方法、置鍼時間までが述べられていることである。

三、治験例が補足してある部分がある。

歴代医学家及び彼自身の治験例も補足してあることから実践的なものを取り入れていることが伺われる。

以上、西洋医学との折衷的鍼灸書として最初にして実に完成度の高い鍼灸書であると考えられる。

承淡安は日本において学んだことが頗る多いことは、本書が当時の日本の鍼灸教科書と同じ形式であることから容易に見出だすことができる。更に日本の鍼灸名著である代田文誌著『鍼灸真髓』を翻訳している。本書は非常に正確に翻訳されており、中国に沢田流取穴法を知らしめた原器であることは間違いない。また、別の訳者で『鍼灸治療臨床学』も翻訳されていることから当時注

目されていた傍証になりうるものである。

以上、承淡安の業績は中国鍼灸学の歴史上、日本に留学してその方法を輸入し、西洋医学を包括した鍼灸学を確立し、日本の鍼灸の名著を中国本土にも紹介した大変重要な地位にあるものである。当時、「振興中華の廃絶」を趣旨とした西洋医学との折衷的鍼灸書は日本の翻訳されたものが多く、彼の著作が最も早く中国独自で著されたものであると考えられる。

(岐阜県鍼灸師会、日本鍼灸研究会)